

津山郷土博物館だより【つはく】

津博

TSUHAKU

2010.9
NO.

66

CONTENTS

- ◇ 博物館の夏休みプログラム
「弥生土器をつくろう」
「勾玉をつくろう」
「トンボ玉をつくろう」…………… 2
- ◇ 「弥生土器をつくろう」
参加感想文…………… 3
- ◇ 先生のための体験教室
「勾玉とトンボ玉をつくろう」…… 4
- ◇ 刀剣の手入れ…………… 4
- ◇ 中学生職場体験…………… 5
- ◇ 永礼孝二展…………… 5
- ◇ 皿村煙硝蔵について
尾島 治…………… 6
- ◇ 催し物案内
国文祭つやま記念企画展「西東三鬼」
特別展「廣瀬臺山—「白雲餘影」とその後—」
…………… 8

Tsuyama City Museum

津山郷土博物館

■ 博物館の夏休みプログラムとして「弥生土器をつくろう」、「勾玉をつくろう」と「トンボ玉をつくろう」を行いました。

「トンボ玉をつくろう」は8月3日・4日・5日、「勾玉をつくろう」は8月10日・11日・12日のそれぞれ3回行い、参加した子供たちは一生懸命、自分の作品に取り組んでいました。

また、「弥生土器をつくろう」は7月28日に粘土をこねて土器をつくり、乾燥させた後、8月19日に野焼きをして完成させました。大変な猛暑の中でしたが、子供たちは土器が焼き上がる様子を興味深そうに観察していました。

トンボ玉づくり



勾玉づくり



★土器をねんどで作る時、とても時間がかかり、むずかしいことが分かりました。ねんどをひも状にし、重ねていく時、ねんどの長さが足りない時があり、ねんどをくっつけるとひもが切れてしまったり、形がおかしくなるので、最初からやり直さなければならないので、よけいに時間がかかり、むずかしかったです。土器を焼く時、どんな風になるんだろう？と、ワクワクしました。途中ピンク色になると聞いて、不思議に思いました。それに、とてもあつかったです。弥生時代の人は、こんな大変なことをしていたんだと思いました。(高野小5年 砺波巴香さん)

★私は、津山郷土博物館に土器を作りに行きました。1日目の形を作る時、どうやったら大きくできるか、どうやったら縮められるか、教えてもらいながらしていくと、手が茶色になっていました。服も茶色になっていました。2日目は、行く前からワクワクしていました。われないかなあと不安でした。焼くのは「野焼き」といっていたけど分からなくて、焼くところに行って「これが野焼きか」と知りました。暑くて、足もだるくて大変だったけど、火おこしは楽しかったです。また機会があればやりたいです。弥生土器は夏休みの工作として、学校に持っていきたいです。夏休みの良い思い出になりました。また、したいです。(佐良山小5年 水島希望さん)

★弥生土器を作って楽しかった。どんな形にするか考えた。思っていた作り方じゃなかった。大変だった。昔の人はこんな苦勞をしていたんだ。今日、野焼きをした。今日を楽しみにしていた。われるか不安だった。持って帰ったら家であつかう。自分のちゃわんにする。かざったり見せびらかしたりする。学校に持っていこうかな。火おこしも楽しかった。また、したいです。(新野小5年 村田智紀君)

★1日目、ねんどを重ねていく時、先生はかんたんそうにしていたので、かんたんかと思ってやると、いいように長さの調節がむずかしかったです。2日目は、どういうふうに行ったら、焼くのが楽しかったです。それで、焼くところに行ったら、もう火がついていたので、びっくりしました。弥生土器は、外からだんだん焼いていくことが分かりました。弥生土器は、時間をかけて作るということが分かりました。(高田小5年 山田奈央子さん)

★1日目は、土ねんどで花びんやコップを作りました。土ねんどをこねて、長細くして土台をしっかり作って、それからまた長細くして、上に巻いていきました。いろいろ作った中で、一番気に入ったのはお皿でした。10日ほどかわかして、また来ると、もう固くなっていて、自分のはすぐ分かりました。2日目は、焼く作業で、大人の方が焼いてくれました。できた時はすごく熱そうでした。自分のが1個しか分からなかったけど、後で分かりました。(向陽小6年 佐野綾香さん)

★初めて弥生土器を作りました。私の予想とぜんぜん作り方が違いました。ちょっとずつ作っていったので、形とかが変な形をしてしまいました。野焼きの時にわれるのじゃないかなと思いましたが、あまりわれませんでした。野焼きの時の間、博物館を初めて見学しました。古墳や勾玉など、いろいろな物が展示されていました。そのほとんどが本物だから、すごいと思いました。また外にもどった時、土器がピンク色になっていました。私が見たところだと、われていないようなので、よかったです。初めての土器作りだったけれど、うまくできて、よかったです。(一宮小6年 保崎みゆさん)

★土ねんどをこねて、棒みたいにしてから、それをわっかにして、どんどん積み重ねて形を作っていくのが楽しかったです。きれいに作ろうとしたら、むずかかったけど、なんとか形は作れてよかったです。最初は力があるなあと思ったけど、やっていくうちに慣れて、最初よりはかんたんにできました。2日目の土器を焼く時には、土器を焼いている間に火おこしをしたのが、けっこう楽しかったです。火おこしは最初はむずかしいと思ったけど、コツが分かったら、どんどんできて、火はおきなかったけど、よかったです。あと、火おこし以外にも、博物館を1階から3階まで見て、説明してもらえたので、よく分かってよかったです。(林田小6年 小林留奈さん)

★土器って意外とかんたんそうと思いながら始まった弥生土器作り。最初は思ったとおりにスイスイ作れていました。けれど、中ばんにだんだんとねんどがかたまり始め、土器もくずれ始めていました。外側も内側もざらざらして(もういやだ!)と投げ出したくなることや、細くねんどをのびし、くっつけるという作業にあきる時もありました。でも、かわいていないねんどをくっつけていくと、なんとかつぼのような形が作れました。その後、1つ目のリベンジもかねて、もう1つ小さいつぼを作りました。すると予想以上に早くできあがったので、びっくりしました。2日目、あぶりという作業から土器を焼いていきました。ずっと焼いていると、土器の表面がだんだんと黒くなっていきました。焼き上がりも黒いのかなと不安になりました。けれど、少しすると黒からピンク色に変わっているのが分かりました。うれしかったです。かんたんそうに見えて、とてもむずかしいんだなと思いました。また、体験したいです。(一宮小6年 早瀬望芳さん)



■ 先生のための体験教室として 「勾玉とトンボ玉をつくろう」を行いました。

子供たちに人気の勾玉やトンボ玉づくりを小・中学校の先生に体験していただき、授業等の参考にさせていただく目的で、8月18日に小・中学校の先生を対象とした体験教室を開催しました。



トンボ玉製作中



勾玉製作中



火縄銃や蓄音機の実物を見てもらいました

■ 刀剣の手入れをしました

津山郷土博物館に所蔵・寄託の刀剣約30本の手入れを、美作刀剣研究会会員の森三郎氏に依頼して、今年8月20日に実施しました。

手入れの仕方は、まず、前回の手入れで刀身に塗布した油をふき取り、打ち粉（砥石の粉）を全体に塗布。その後、再び油を塗って終了です。このときに使う油はスピンドルオイルという酸化が非常に遅く、油自体の粒子もとても小さいものを使用します。

郷土博物館ではこうした刀剣の手入れを毎年行っており、所蔵・保管する刀剣類をできる限り良好な状態に保つ努力をしております。



■ 中学生が職場体験を行いました。

「つやまっ子デビュー14」の取り組みとして行われた中学生の職場体験活動について6月16日(水)・17日(木)・18日(金)の3日間、津山東中学校の生徒5人が郷土博物館で職場体験を行いました。

1日目は夏休み講座の準備、2日目は3階の展示替え、3日目は掛軸の保存箱の製作と和綴本の修復作業を行いました。



勾玉講座の準備中



資料修復（和綴）風景

■ 新収蔵作品展「永礼孝二展」を開催しました。

新たに永礼孝二の作品が博物館に寄贈されたことを機に新収蔵作品展「永礼孝二展」を6月17日から7月21日まで開催しました。

永礼孝二展への展示替えの日が中学生の職場体験の日であったため、展示を替える作業は主に中学生が行いました。絵をかける高さや間隔、ライトのあて具合など、みんなで色々考えながら作業をしました。

永礼孝二「農村風景」▶



▼ 「永礼孝二展」の展示作業



皿村煙硝蔵について

尾島 治

1 はじめに

津山市内の平福・一方地区に三基の煙硝蔵が遺されており、津山市指定の文化財として保存されている。それらは、古墳のような形態の石積み穴蔵であるが、近世史料との具体的な整合性については、未確認であった。

煙硝というのは近世に用いられた火薬のことで、硝石・木炭・硫黄を混合して作られ、煙硝蔵に保管されていた。津山藩では、半地下式の石蔵を作り、その全体を土で覆っていた。絵図では、瓦屋根が描かれていることもあるが、津山城内は別としても、山間部の煙硝蔵に実際に瓦屋根があったかどうかは疑わしい。

煙硝蔵は、江戸時代の森藩・松平藩を通じて重要な軍事的施設であった。しかし、森藩の改易後、松平藩の入封に際しては、松平藩領地から煙硝蔵所在村が外れるというハプニングが起きてしまった。

ここでは、津山藩の皿村煙硝蔵を含む地所替えの経緯を示す絵図の中で、現在遺されている三基の煙硝蔵が、近世史料上のどの煙硝蔵に該当するのかわを確認しておきたい。

なお、近世の古文書において、煙硝は、焰硝あるいは塩硝とも表記されるが、混乱を避けるために、煙硝に統一して用いる。

2 皿村煙硝蔵の成り立ち

森藩時代の煙硝蔵については資料が乏しく、記録としては『作陽誌』『美作略史』『作州記』『森家先代実録』等に簡略な記載があるのみである。また、その他の資料としては、元禄以前の様子を伝える絵図に、煙硝蔵の描写が見られるものがある。

そうした中のひとつである山北村の煙硝蔵は、城下町の北西に位置する丘陵上に置かれていた。現在の津山市立北小学校の敷地内である。ちなみに、煙硝蔵の東の辺りは十六夜原と呼ばれていたという。『美作略史』によれば、この煙硝蔵は、元禄八年(1695)九月から十月にかけて、皿村に移転された。山北村の場所は人家に近く危険だとの判断だという。移された煙硝は約二十万斤であった。

『美作略史』では、この記事の割り注として、森家改易後に入封した松平家が、皿村を領地に含まなかったため、皿村を領有することとなった甲府徳川家との交渉で、松平藩領の一方村と皿村の一部地所替えを行って、煙硝蔵を領内に取り込んだという。

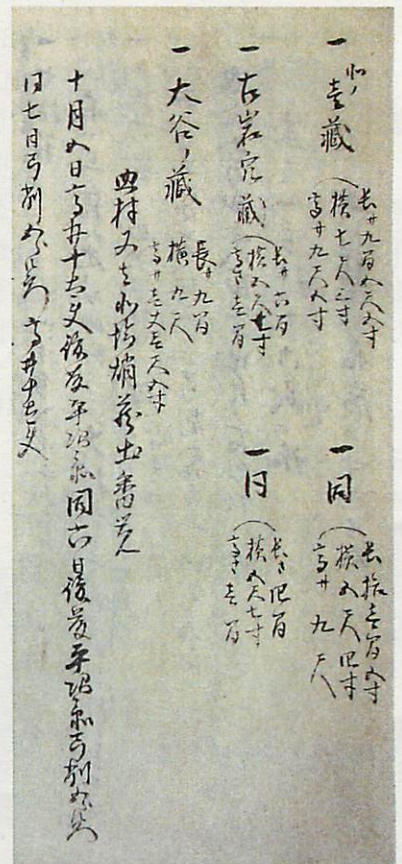
3 絵図に記された煙硝蔵

皿村の煙硝蔵は、『作州記』に「皿村蔵三ヶ所、道法津山より二十町。」とある。更に「元禄七八年頃に出来・・・」とあり、山北村からの移転の話と符合している。煙硝蔵の地所替えの対象となったのは、この皿村の煙硝蔵であった。

天明二年(1782)の中嶋村絵図(「中嶋村絵図」矢吹弓斎叢書318、当館

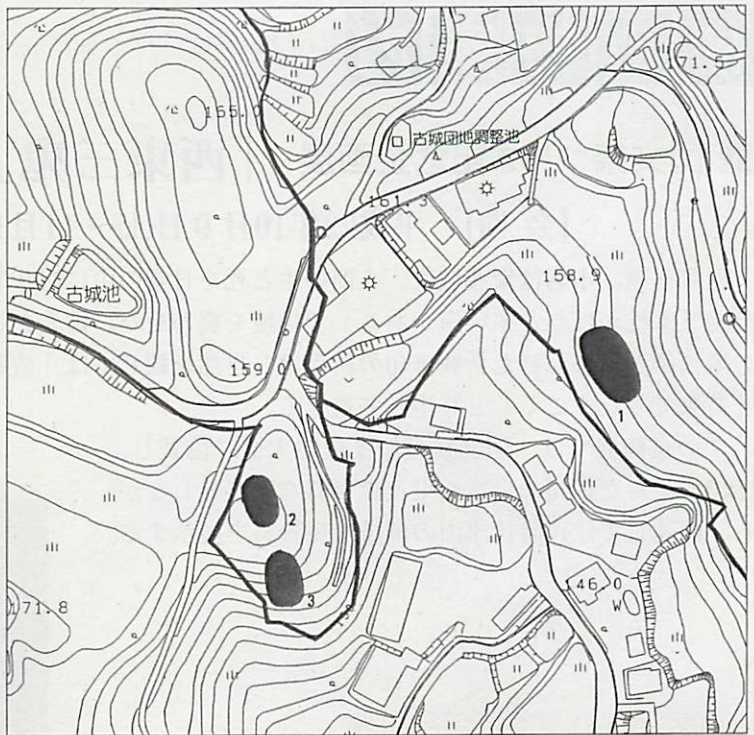
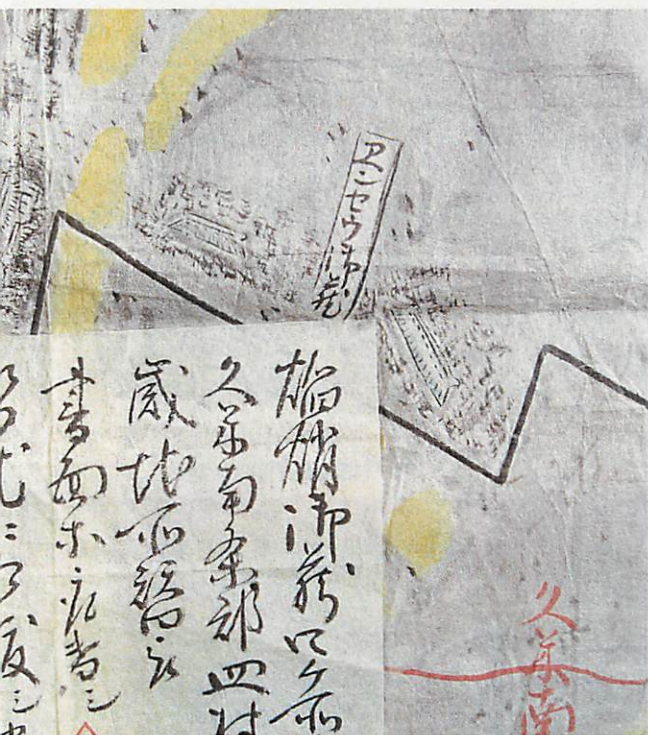


中嶋村絵図(部分)



塩硝取運諸勘定帳(部分)

皿村の四ヶ所の煙硝蔵と大谷村の煙硝蔵が記録されている。



赤い線は道筋を示す。黒い線が村境を示す。上側が一方村。下側が皿村。煙硝蔵付近が、不自然に一方村に属していることが分かる。

津山市集成図上の煙硝蔵（部分）（津山弥生の里文化財センター作製）
境界線の下側が皿地区。上側右が一方地区。上側左が平福地区。

寄託)には、一方村分に三つの煙硝蔵と番所が描かれている。そして、その部分に張り紙があり、四ヶ所の煙硝蔵のある場所が皿村分に含まれていて、皿村は甲府藩領であったため、元禄十六年(1703)に松平藩領である一方村と同面積の地所替えをして、その結果、小丸山が皿村となり、煙硝蔵が一方村に入ったとしている。

絵図には、三つの煙硝蔵しか描かれていないのに、張り紙では四ヶ所の煙硝蔵としていることについては、様々な可能性が考えられるが、ここでは、絵図の西側の蔵の近くに描かれている白抜きの長方形が蔵を意味していると理解しておきたい。そうすると、四つの煙硝蔵は、地元につながる表現を用いれば、右端から東蔵、中蔵、西藏上、西藏下とすることができよう。

ここで、中嶋村絵図と現況集成図とを見比べてみると、村境や道筋、池や小丸山の位置から、煙硝蔵の配置が酷似していることが分かる。

この四ヶ所の煙硝蔵に関しては、山北村の北煙硝蔵から皿村への煙硝移転に関する資料として、「塩硝取運諸勘定帳」(「森家記録1」矢吹弓斎叢書132)がある。

この中で、煙硝の移転作業が日記形式で記録されているのであるが、その末尾に皿村煙硝蔵が四ヶ所記載されている。その内の二つは「北ノ壺蔵」と「同」と表現され、他の二つは「古岩穴蔵」「同」とされているのである。「北ノ壺蔵」と「同」の蔵はやや大きめで、「古岩穴蔵」は小振りではほぼ同じ大きさである。そのサイズを現在残っている三基の煙硝蔵と比較すると、この、「北ノ壺蔵」と「同」が東蔵(元治元年(1864)に爆発)と中蔵と考えられ、「古岩穴蔵」ふたつが、その表現からして古墳を利用したと見られる西藏上と西藏下であると考えられる。すなわち、現状の煙硝蔵1が中蔵であり、2が西藏上、3が西藏下に相当すると考えられる。

煙硝蔵跡一覧表

3	2	1	番号
平福	平福	一方	所在地
—	2.8	3.8 3.5	羨道部長
1.2	1.3	1.3	同幅
15*	8	19.5	石室長
2	2	2.3	同幅
2.1	1.9	3	同高
<p>入口部分に土が厚く堆積しているため、羨道部と石室の区別ができない。石室西壁の一部を積み直している。入口壁面に漆喰痕が残る。石室長は全長。</p>			備考
<p>北西と南に二つの羨道部をもつ。石室の入口には二重扉の礎石があり、扉の軸受けのほぞ穴が残る。</p>			
<p>片袖式の横穴式石室を利用。石室入口には二重扉の礎石がある。入口天井石は新たに組まれたもの。羨道部壁面には漆喰の痕跡が残る。</p>			

(津山弥生の里文化財センター作製)

催し物案内

■ 国文祭つやま記念企画展 「西東三鬼」

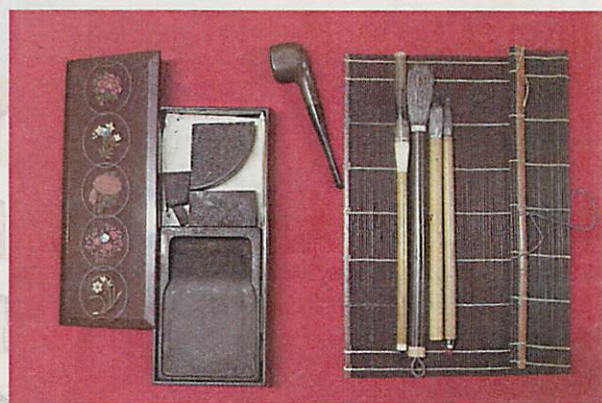
【会期】平成22年10月9日(土)～11月10日(水)

西東三鬼、本名は斎藤敬直。人間の生と死を日常の中に切り取って見せた「水枕がばりと寒い海がある」で俳壇を震わせた。俳人をして言葉の魔術師と言わしめた新興俳句の旗手は、自然を観じては「枯蓮のうごく時来てみなうごく」と写生して見せる。

この企画展では、国文祭つやま俳句大会に協賛し、津山が生んだ俳句の鬼才西東三鬼資料を中心としながら、関連して江戸時代津山の俳諧関係資料を展示する。



清水崑が描く西東三鬼の似顔絵



西東三鬼愛用の文具類とトレードマークのパイプ



■ 特別展

「廣瀬臺山—『白雲餘影』とその後—」

【会期】平成22年11月13日(土)～12月12日(日)

これまで、画集『白雲餘影』によって文人画家臺山のイメージが形作られてきた。そこには、精神性の高い理想郷を描く士大夫にふさわしい文人画の世界が広がっていた。

しかし、近年、いわゆる文人画の世界を越える臺山の作品が知られるようになった。それは、予想外に重く濃密な楼閣山水図であったり、まさかと思う浮世絵風の美人画であったりする。趣の異なる作品の対比によって、画家としての臺山の奥深い絵画世界を探る。

◀ 廣瀬臺山画 遺琴贈帰図。隣村の友人と酒を酌み交わした後、忘れて帰ってしまった琴を、翌朝、童子が送り届けてくれる様子を描く。高山と流水の景に交誼の情が静かに重なる。

■ 博物館入館案内 ■

- 開館時間：午前9：00～午後5：00（入館は4：30まで）
- 休館日：毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
- 入館料：一般 210円（160円）
高校・大学生 150円（120円）
中学生以下 無料

※（ ）は30人以上の団体



博物館だより 津博 No.66 平成22年9月1日

編集・発行：津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
TEL (0868) 22-4567 FAX (0868) 23-9874
E-mail：tsu-haku@tvtnet.jp

印刷：株式会社 廣陽本社

